

## 『1984年』

2017年09月30日

ジョージ・オーウェルの小説『1984年』は古典的な本で、至るところで引用されている。ところが、読んだことがあるという人は多いが、実際には読んでいない本だそうである。トランプ大統領が選出された頃から、米国で『1984年』はベストセラーになっているという。書棚にあった本を取り出し、読み直した。私も読んだつもりでいたが、全部を読んでいなかったようだ。ぞっとするような恐ろしい本である。「ビッグ・ブラザー」が支配する全体主義的政治の中で、人間性を全く否定した悲惨な生活を強いる権力の魔性を描いている。あらずじは下記のように展開されている。

時は1984年に設定されている。3つの超大国によって分割統治され、間にある紛争地域をめぐって絶えず戦争が繰り返されている。舞台となるオセアニアでは、ビッグ・ブラザーが率いる全体主義が支配している。思想・言語・結婚などあらゆる市民生活は統制され、物資は欠乏し、市民は常に「テレスクリーン」と呼ばれる双方向テレビジョン、町中に仕掛けられたマイクによって屋内・屋外を問わず、ほぼすべての行動が当局によって監視されている。ロンドンに住む主人公ウィンストン・スミスは役人として、歴史記録の改竄作業を行っていた。記録が絶えず改竄されるため、旧体制時代の記録は定かではない。現体制に疑問をもっていたウィンストンは、ある新聞記事を読み、その疑いは確信へと変わる。同僚の若い女性、ジュリアから手紙による告白を受け、古物売る老人の店を隠れ家として彼女と愛し合う時を過ごすようになる。性は楽しみや喜びではなく、子どもを産むためのものとされ、二人の逢瀬は規則違反であった。ウィンストンが話をしたがっていた党内局の高級官僚のオブライエンと出会い、現体制に疑問を持っていることを告白した。オブライエンより禁書を渡されて読み、体制の裏側を知るようになる。ところが、密告され、ジュリアと一緒にウィンストンは思想警察に逮捕され、尋問と拷問を受ける。彼は、徹底的に打ち砕かれ、体制の思想を受け入れ、処刑（銃殺）される日を想いながら、ビッグ・ブラザーを受け入れ、愛するようになる。

「ビッグ・ブラザー」の支配は「戦争は平和なり、自由は隷従なり、無知は力なり」の世界である。自由も愛もない、言葉も思想も持てない権力に従うロボットにならざるを得ない恐怖が覆っている。平和省は戦争を遂行し、真理省は嘘を並べ、愛情省は党の脅威となる人物を捕え、拷問し、殺していく。主人公のウィンストンは疑問を持ち、反抗しようとするが、密告されて逮捕され、厳しい拷問を受ける。小説の最後は「彼は今、ビッグ・ブラザーを愛していた」と、権力に懐柔されたシーンで終わっている。夢も希望もない権力側の勝利が終幕である。

ソビエトのスターリン時代は、数千万人が粛清されたと言われている独裁政治であった。ドイツのヒトラー時代、「ハイルヒトラー」を強要され、子どもが親を密告する非情の恐怖が蔓延した。北朝鮮は、金正恩委員長を称えさせられ、国民は瀕死の状態にある。米国の政府による監視体制は『1984年』に描かれた状況にあるという。それが『1984年』をベストセラーにしたのであろう。日本でも、国民にマイナンバーが付けられ、「特定秘密保護法」によって自由な発言が規制されていく危険がある。『1984年』に描かれた監視管理社会は寓話ではなく、身近な問題であると警告している。権力は自己保存と強化に向かう魔性を内包している。権力は国民に奉仕し、殊に社会的弱者の生存を保障するためのものであるように、国民が厳しく監視しなければならない。